敬愛

再考

　私が大学生になって以降、特に熱中しているコンテンツの一つとして「ボカロ」がある。人間の声ではなく、初音ミクをはじめとする合成音声を用いて制作された音楽を表すジャンルのことだ。同年代のオタクだと、小中学生の頃によく聴いていたという人も少なくないだろう。しかし、私のその頃はというとゲームを含めてインターネットの使用にはかなり制限を受けていて、ボカロに熱中する切っ掛けをあまり持つことはできなかった。

　もっとも、そうは言ってもDECO*27の『妄想感傷代償連盟』やカンザキイオリの『命に嫌われている』など、ごく数曲を偶然知って以来繰り返し聴いていた。

　そんな私が、ボカロに熱中するようになった原因は、何よりも環境の変化にあると言えるだろう。高校生になってようやく自分のスマホを買い与えられ、amazarashiというロックバンドの楽曲を隅々まで聴く一方で、音ゲーという趣味を通じてEDMの要素を含む音楽なども好むようになっていった。その中で、後々ボカロを好むようになる下地が整っていったと言えるだろう。しかし、私がボカロに関連する音楽として高校生の間に関心を持っていたのは、amazarashiに強く影響を受けていると公言するカンザキイオリの楽曲や、そのカンザキイオリが作詞作曲を手がけるシンガーである花譜の楽曲、さらには花譜の歌声を元にして制作された合成音声である可不といった作家やキャラクター単位にとどまっており、ついぞジャンルとしての「ボカロ」に深く足を踏み込むことはなかったのである。

　ところが、大学一年の夏、全てを変えてしまう決定的な出会いがあった。七月も終わりに差し掛かり、受験勉強などのストレスに苛まれることのない数年ぶりの夏休みに対する期待に胸を膨らませていた頃、折しも「無色透名祭」と題したボカロ曲の投稿祭が開催されたのだ。ここで言う「投稿祭」とは、決められた日時に多くのクリエイターがニコニコ動画上に動画を投稿し、視聴者やクリエイター同士でそれを見合って盛り上がろうという趣旨のインターネット上の祭りのことだ。ボカロ曲に関しては、2020年の冬より毎年2回のペースで、ニコニコ動画公式の大々的なバックアップを受けた「ボカコレ」という投稿祭が開催されており、実に数千曲のボカロ曲が一斉に投稿され、再生数などから決定されるランキングのもとで熾烈な争いを繰り広げている。しかし、既に知名度の高いクリエイターがランキングの上位を埋め尽くすことが多く、有名でないボカロPが一発逆転で高く評価されることは困難である。また、こうしたランキング付けが過度な競争を煽り、勝利至上主義的な価値観が

蔓延することでクリエイターにストレスをもたらしたり、音楽的な多様性が損なわせたりしているのではないかという見方もある。

しかし、このとき開催された「無色透名祭」は、こうした問題を抱えているボカコレに対するアンチテーゼとして企画されたものであった。元々の知名度に関係なく、純粋に音楽のみを楽しむ環境を提供するというコンセプトで、参加する全ての楽曲が開催期間中は作者不明の状態で公開されることとなった。また、MVもごく単純なリリックビデオのみが許可されており、音楽に直接関係のない部分での評価を削ぎ落とすというものとなっていたのである。

折しも大学生となり、以前より少しボカロを幅広く聴くようになり始めたタイミングで、このような既存の有名アーティストを知らなくとも楽しむことのできるイベントが開催されたのは、私にとって非常に幸運なことだったと言える。

さて、実際に開催期間となり、私はニコニコ動画を開いてどのように曲を聴いていくかしばし思案していた。数千曲が匿名で一斉に公開された状況では、取り敢えず知っている人の曲を聴いてみるといった方法は使えない。ひとまず再生数順に動画を並び替え、動画のタイトルを上から眺めていた、その時のことである。

叙情的な雰囲気を纏った題名が並ぶ中、ひときわ私の目を引いたのは、えらく挑発的で、何かを突きつけようとするような文字列であった。

『名前すら明かせない批評家たちへ』と題されたその動画の再生ボタンを、私は導かれるようにクリックしていた。

たちまち流れ出したのは、どこか私がこれまで音ゲーの音楽を思い出す、ボカロ曲としてはおよそ似つかわしくないと思われたソリッドな重低音である。こんな音楽を作る人がこの場所にはいるのか。一体どんな人なのだろう。そう考えつつ、流れてきた歌とともに歌詞に目を向けると、これまた特異的な、社会や大衆に対する批判を繰り広げる言葉が綴られていた。インターネット上の匿名の言論空間の中でも、一つ一つの言葉や考えを責任をもって送り出していくという矜持の表明は、誹謗中傷及びそれに対する開き直りが蔓延したインターネット、それもその極致であると思っているニコニコ動画において、燦然と輝いて見えるものであった。

それから間もなく、私は件の楽曲の作者と思われる、椎乃味醂（しいのみりん）というボカロPの楽曲に夢中になった。当時既に投稿されていた『死んでしまったんだ』や『ヘテロドキシー』といった楽曲では、彼が人文学などを学んで得た知識や、彼自身の社会に対する考えが存分に盛り込まれている。マルクスの説く資本主義社会における労働者の疎外や、ボードリヤールの『消費社

会の神話と構造』などを背景にもつと思われる消費社会への批判の表明は、当時の私にとって非常に目新しいものとして映った。

もっとも、往年のロックバンドのような資本主義や商業主義に対する批判を表明するミュージシャンを私は確かに知っていた。しかし、彼らは直接的に書籍を引用する訳ではなく、むしろ感情に任せて衝動的に反抗を歌っているように思われた。

その点で、椎乃味醂のスタイルは特異的である。社会批判的な考えを抱いているクリエイターはある程度存在しているだろうが、クリエイターにノンポリであることを往々にして求める現代社会では、彼らはその感性を覆い隠してしまう。しかし、彼は「考えたつもりになっていた人たちが、この国を壊していた。」とまで直接的な批判を言ってのけるである。

そうして、こうした音楽が日々生まれ、鑑賞される場としての、今まさに進行している「ボカロシーン」に私は興味をもつことになった。そこからは早く、私が音ゲー音楽を通して EDM に親しんでいたことも相まって、2020 年代の必ずしも伝統的なバンドサウンドではないボカロ曲を中心に、様々な楽曲を聴いていった。

その過程で実感したのが、「ボカロ」であるということは音楽ジャンルをほぼ制限しないということである。合成音声を用いる以上、基本的に歌詞のある歌モノであることが要求されるが、それ以外は全くの自由であり、実に様々な音楽ジャンルに触れることができ、無尽蔵に新曲が湧いて出てくるようなこのシーンに夢中になった。

こうして、私は「ボカコレ」という年2回のペースでニコニコ動画にて開催されている、ボカロ曲を投稿し再生数などで順位を競う賞レースにも関心をもつことになった。何より、敬愛する椎乃味醂が毎回ボカコレに新曲を投稿しているため、自然とボカコレで彼以外の作品もチェックすることとなった。

しかし、そんな折に脳裏を過ったのが、彼が楽曲『ヘテロドキシー』にて述べていた、おそらくボカコレに対すると思われる痛烈な批判だ。

記号を貼り合わせる行為を創作と称した作品が氾濫し、市場は破壊され品質の持つ価値が棄損される。その極致のような瞬間がまさに今日である、と述べる歌詞の楽曲を彼は 2021 年のボカコレ当日に投稿していたのである。この楽曲は、そうした絶望的な状況下でも自らの目指す創作を追求したいという表明を、ニーチェの「永劫回帰」を援用しつつ行う。そして、「爆弾を投げさせてくれ！」と激情的な歌詞とともに、楽曲は終幕を迎えるのである。こうした作品を投稿したにも関わらず、彼はほぼボカコレにしか新曲を投稿せず、ボカコレを主催するニコニコ動画にも表立って批判を行うこともない。これは一体ど

ういうことなのだろうか。昨年から、私はこの疑問を抱き続けていた。

ところがそんな折、ついに私の疑問に答えると思われる楽曲『1ピース』を彼は先日のボカコレで発表した。本楽曲は東浩紀の『動物化するポストモダン』を思想的背景としていると思われ、かつて世界を覆っていた共通のイデオロギーとしての「大きな物語」が喪失した現代において、ただ好みの属性を組み合わせたコンテンツが動物的に消費されているという考えが、ボーカロイド文化にも当てはまると椎乃味醂は考えているのだろう。これは、先述の『ヘテロドキシー』の頃から変わらない。しかし、『動物化するポストモダン』の特色は、「動物的」にコンテンツを消費することを、東が明確には否定的にも肯定的にも述べていないことにある。歌詞を読み込むうち、『1ピース』にもこの構造が取り入れられているのではないかという考えに私は至った。椎乃味醂は「食べて」「の繰り返しで」「みんな大きくなっていく」と言い、最終的に俯瞰的で叙事的な言明で楽曲を締める。そうだとすれば、彼は構造そのものの破壊ではなく、構造を所与のものとしてどう振る舞うかを考えているのではないだろうか。それは一見後退のようにも見えるが、彼ほど思慮深い人間が単に諦めたとも思えない。ヒイスの『反逆の神話』などの影響もあるのではないかと考え、私はさらに歌詞を読み込んでいる。

だが、私は今彼にいくばくかの反感を覚えてもいるかもしれない。かつての「爆弾」のような強迫や社会変革の意志は失われたかもしれないからだ。

だが、単に意志を示すだけでは資本主義に回収されてしまう現代社会において、彼の試みは期待できるかもしれない。ボカコレという構造内部で常に批判を提示し続けることで、構造の固定化を阻止し緊張状態を誘発し続けているのではないかと私は考えている。

こうした彼の試みを含め、私はボーカロイド文化をこの先も見守り、ゆくゆくは創作者の一人として参画したいとさえ思っている。